

2024年8月4日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教4「あなたはだれか」

イザヤ40：3～5、ヨハネ1：19～28

洗礼者ヨハネとは、一体どういう人物であったのか。今日は「あなたはだれか」という説教題ですが、これはユダヤ人たちがヨハネに投げかけた問いです。この言葉に表されているように、ヨハネは実に謎に満ちた人物でありました。主に荒野を中心に活動し、イエスさまに洗礼を授け、そして最後はヘロデによって殺されてしまう。しかし、その影響力は強く、ヨハネの弟子たちが、後にヨハネ教団を形成し、その集団がこの福音書の成立にも深く関わっていると考えられています。

マルコ福音書には次のようにあります。「洗礼者ヨハネが荒野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた」(マルコ1：4～6) そのように大勢の人たちが洗礼者ヨハネのところに集まって来て、彼から洗礼を受けていました。そうなりますと、ユダヤ人たちは、あの人物は一体だれかということになるのです。「あなたは、どなたですか」(1：19) これは少し丁寧な印象になりますが、この時の状況を考えると、これは尋問のようなものです。神の民であるユダヤ人に洗礼を授けるとはどういうことか。別の宗教に改宗させようとしているのか。そういう警戒心があると思います。ですから「お前は誰だ」「誰がそのようなことを許可をしたのか」そういう感じでしょう。

その問いかけに対して、ヨハネは「わたしはメシアではない」(1：20)と言います。これは「わたしはキリストではない」という言葉です。ちなみに20節にあります「公言して」と「言い表した」と訳されている言葉は、二つとも同じ言葉でしてホモロゲーセン、これは信仰を言い表す時に用いられる特別な言葉です。つまりヨハネは「わたしはキリストではない」という否定の形で信仰告白をしたということになります。この言葉は、この後の26節以下「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない」(1：26～27) この「わたしの後から来られる方」こそメシア、キリストであるという伏線になっています。わたしの後から来られるお方に場所を譲る。それが「わたしはメシアではない」という否定の形でヨハネの信仰告白となって表れました。

わたしたちは、神さまを中心にするのではなく、自分を中心にするという傾向があります。なかなか神さまに場所を譲ることができない。神さまの御心よりも自分を優先し、自分の思いを通そうとする。そもそも人間の罪は、あの創世記の物語によれば、人間が神さまよりも賢くなろうとすることでした。神さまを差し置いて、自分が神になる。そこに罪の本質があります。それは言い方を替えれば「わたしこそメシアである」と言い張ることです。これはヨハネの告白「わたしはメシアではない」とは正反対の生き方と言ってもよいでしょう。

けれども、そのように自分こそメシアであると、神さまに場所を譲ることができないわたしたちのところにはイエスさまは来られました。そのことがよく表れている言葉が26節の「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」という言葉です。この「知る」(オイダ)

は、ヨハネ福音書でも頻繁に出てくる言葉で重要な意味を持ちます。これは単なる知識として知るといふより、人格的に出会うことです。しかしこの世はまだイエスさまを知らない。「知らない」ということは、イエスさまの存在を受け入れない。神さまに場所を譲ることができない、わたしたちの罪の姿に他なりません。でもだからこそ、「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」ことは、実に恵み深いことです。わたしたちが知らなくても、認めていなくても、忘れてしまっても、イエスさまはわたしたちの真ん中におられる。そこにこそ信仰の確かさがあるのです。

ある人は、このことについて、イエスさまが「この世を根源から支える心棒、支柱として立っている」と記していました。不信仰な時代であり、神さまに背き続けるわたしたちです。だからいつ倒れてもおかしくない。何より、その不信仰ゆえに、人間はイエスさまを十字架につけて殺したのです。それでも「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」です。それはこの不信仰に打ち勝って、三日目によみがえられた勝利のイエスさまがそこにおられるということでしょう。心棒、支柱のようにイエスさまがわたしたちの人生の真ん中に立っておられる。だからこそわたしたちは信仰を続けることができる。教会が存在し続けるのです。自分の力で、人間の知恵で信仰が成り立つ、教会が存続すると考えるのは傲慢です。たとえわたしたちが知らなくても、イエスさまがわたしたちの只中におられるという恵みによって信仰は支えられています。

説教の冒頭で、洗礼者ヨハネとは誰かという問いかけがありました。この問いは、おそらくヨハネ自身がいつも自らに問いかけていたことかもしれません。自分は一体誰なのか。なぜこの荒れ野に来て、人々に洗礼を授けているのか。実は、この「荒れ野」も聖書では意味のある場所です。何より「荒れ野」はイスラエルにとっては、出エジプトの40年に渡る荒れ野の放浪を思い浮かべる場所でした。けれども、その荒れ野でイスラエルは海の奇跡を体験し、十戒を授けられ、マナの養いを受けました。何もない荒涼とした土地で、彼らは神さまと出会い、神さまの恵みを体験しました。荒れ野は、神の民が、もう一度、原点に立ち返るようなところ、初心に帰ってやり直すところと申し上げてよいでしょう。

ヨハネが、荒れ野にこだわり、そこに居続けたのは、神さまと向き合い、自分とは誰かを見つめるためなのではないでしょうか。自分に与えられた命の意味、この世での使命も、それは神さまから示されることです。何よりこの世という荒れ野にイエスさまが来られたことを忘れてはいけません。「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」(1:14) そのようにして、神さまはわたしたちと深く出会ってください。十字架におかかりになられ、ご自身の命を持ってわたしたちを養われます。そして三日目によみがえられた勝利のイエスさまが、たとえわたしたちが知らなくても、気づかなくても、この荒れ野に立ち続けてくださる。そのようにして何度でもわたしたちを立ち直らせてくださる。教会もまたそういう場所としてこの世に存在しています。

天の父よ。自分は誰なのか、ときに自分を見失うわたしたちです。でもそのようなわたしたちのためにあなたはイエスさまをこの荒れ野にお遣わしくくださり、そこでわたしたちと出会ってください。たとえわたしたちが知らなくても、そこに立ち続け、出会い続けてください。どうぞその恵みを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。